

蘇芳集

若木

高橋 さえ子

遠く咲く

青山

丈



海照りや蜜柑の若木鈴生りに
夕雲の光を残し初氷
病良し盆梅は日をあふれしめ
狐啼く夜や王子の稲荷みち
流水は赤き日沈め山ざくら
朝の日に溢れ手水の薄ごほり
藻草の根一筋長し彼岸寒

遠く咲く辛夷をとほくしておきぬ
誰からかどこかに咲くと花便り
西空の空へ続いて彼岸入り
遠くなりかけたる老に花吹雪く
花吹雪く中を抜けたる自力かな
雨の降る駅に桜のをはるかな
桜葉降るそんな日もあつたのだ

晴 天 上林孝子

午後よりの日の斑をのせし寒椿
川音のまだ定まらず猫柳
晴天の芽吹き仰ぎて飢少し
啓蟄や雲のかげ濃き鶴見川
枯蔓のなほも絡まる余勢かな
春近し昨日も今日も筆不精
表札の夫まだ生くる明日立春

何を見に 木内憲子

耕の一字にしてはるかなる
どの夢もきれぎれ水の温むころ
三月の雑木林に日のたぎる
うららかに集ひて何を見に行かう
人憶ふこととはひたにあたたかき
恋猫は夜の切れ端のごとくなり
大空は芯まで濡れて桃の花

朱の花 小島みつ如

いま愛しむは草木瓜の朱の花
草木瓜やひと尋へだて仲間ふえ
草木瓜を得るは武蔵の絹の道
風にゆれず雨に震へるヒヤシンス
丹精の婆のレモンよ彼岸ずし
吐息すとたましひちぢむ鳥雲に
「光海」とふ町の穏やか梅は実に

尊の像 清水裕子

海をみて森を歩みて春一と日
「尊の像」仰ぐ高さに松の芯
人波にゐても独りの梅見なる
しだれ梅身を入れて何も考へず
句作りに励むは力青き踏む
春を病む人への祈り辛夷の芽
集ひては余寒の豊頰ち合ふ

その日の桜

真保 喜代子

春 愁

長沼 三津夫

繫留の巨船灯す花の雨
元号が決るその日の桜かな
この丘も向ひの丘も桜咲く
花咲くと漣騒ぐ運河かな
長過ぎて人居なくなる花堤
ひと日には葬に参り春愁
つくづくと竹の反骨竹の秋

先生

富田 正吉

春が来て

野路 斉子

先生に椿を渡す夢の中
紅梅は満開顔を洗はねば
雪椿この世はさみしすぎますか
すれ違ひざまに椿のことを言ふ
初蝶にぼんと手を打つことなども
落椿まつすぐゆけと言はれても
先生の声のもつともあたたかし

春が来てもう走らない転ばない
ご近所に東京タワー春の雷
東京の若葉称へて北びとは
高階の灯にありありと椽の花
探しゐる鳥ゐて椽の花が邪魔
森番に牛肉届く薄暑かな
カーネーションの束抱く既に母の顔